



TITLE:

任昉述異記について

AUTHOR(S):

森野, 繁夫

CITATION:

森野, 繁夫. 任昉述異記について. 中國文學報 1960, 13: 54-68

ISSUE DATE:

1960-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177081>

RIGHT:

任昉述異記について

森 野 繁 夫

廣島大學

述異記には周知の如く、今日傳わるものに梁の任昉^{じやうほう}撰と南齊の祖沖之^{そうちし}の撰の二つがある。祖沖之述異記は文獻に照らしてみるに、確かに祖沖之のものであり疑う餘地も無いが、任昉述異記の方は、世に梁の任昉の撰と傳えられてはいるが、その眞僞は明らかでない。

小論では、この任昉述異記の諸本、内容及びその僞作に關する問題について検討を加え、些か管見を述べようと思ふ。^①

(一)

任昉述異記のテキストは現在、稗海、漢魏叢書三十八種、同七十六種、同八十六種、龍威秘書、百子全書、隨齋徐氏

叢書などの叢書に收められているが、うち最もすぐれるのは、宋の慶元四年に刊行された臨安府大廟前經籍舖尹家刊本を近ごろ徐乃昌が景刻した徐氏叢書本であつて、その本の第四十四條、「洞庭湖中有釣洲」の條の末の句、「大如拳苦」の苦の字から、第五十四條「中山有楸戸」の條の末の句、「漢書貨殖志千年楸」の千の字までを、三種の漢魏叢書及び龍威秘書本は脱している。稗海本、百子全書本は徐本と同じく、この脱文はない。

徐本を検すると、他本の脱文はあたかもその第七葉にあたる。漢魏叢書三十八種以下の本も、同じ宋本に出るが、據るところの本が一葉を脱していたのである。

(二)

任昉述異記に收められている説話は、大部分が異物に關するもので、異物の所在、性狀、それにまつわる出來事や傳説などを説明的に記録したものである。その異物は動植物をはじめとして、土地、山川、建造物等々あらゆる物に及んでおり、いわば當時流行の地方志、その中でも特に異

物志的傾向を持つてゐる。

今、それぞれ二三の例を擧げてみるに、先ず動物に關しては、

北方の荒外に石湖あり、方十里なり。中に横公魚あり、夜は即ち化して人と爲る。之を刺すも入らず、之を煮るも死なず。若し烏梅二十箇を以て之を煮れば即ち熱す。邪病を治す可し。

淮南に懶婦魚あり。俗に云う、昔楊氏の家婦、姑の怒る所と爲り、溺れて死し化して魚となる。其の脂膏は燈燭を燃す可し。之を以て鳴琴、博奕を照らせば、則ち爛然として光あり、紡績を照らすに及べば、則ち復た明らかならずと。

東海に牛魚あり、其の形は牛の如し。海人採捕し、其の皮を剥ぎて之を懸くるに、潮水至れば則ち尾立ち、潮水落けば則ち尾伏す。

この他に、精衛 蛟妾 舞雀 水虺 琵琶魚 獬豸 却塵犀 貔貅 風生獸 六角牛 怒毛獸 獅子禽 報春鳥 伺潮雞 獬豸 虎魚 蛟羊 蠅 肥遺 漱金鳥 石首魚

任昉述異記について（森野）

環珞 木客鳥 丹魚 筋などに關する説話があり、又、盤古 鬼母 防風氏 蚩尤などの話もある。

次に植物に關しては

龍肝瓜は長さ一尺、花は紅にして葉は素く、氷谷に生ず。いわゆる氷谷素葉の瓜なり。

黄金山に楠樹あり。一年は東邊榮えて西邊枯れ、後年は西邊榮えて東邊枯る。年年かくの如し。張華云う、交讓樹なりと。

楚中に宮人草あり。狀は金盞の如くにして甚だ氣氲なり。花の色は紅と翠なり。俗に説う、楚の靈王の時、宮人數千、皆愁曠多し。宮中に囚死する者ありて之を葬るに、後、墓上に悉く此の花を生ずと。

この他に、孤竹 空桑 相思木 辟寒香 迷穀 玉桃 仙人杏 眞香茗 返魂香 蔓竹 石樓樹 子母竹 金李 豫章 禹餘糧 龜甲香 紫朮香 千步香 威蕤草 懸腸草 苔草 萱草 睡草 舜草 長春樹 席箕草 紅蘭花 莪葵 寡草 紅綬花 楓子鬼 丹青樹 櫛子樹 桃柳 五色瓜 桃都 貝多樹などに關する説話が見える。

次に土地や山川に關しては

宣城の蓋山に舒姑泉あり。俗に傳う、舒氏の女あり、父と薪を析る。女の泉の處に坐するや、忽ち牽挽けんゐんげども動かず。父遽いそぎて家に告ぐ。再び其の地に至るに及び、惟 清泉の湛然たるを見るのみ。其の母曰く、女は音楽を好みりと、乃ち絃歌を作せば泉は乃ち涌き流る。

儋耳郡の名山に二石あり、人の形の如し。昔 兄弟二人あり。海にて魚を捕り、因て化して石と爲る。因て兄弟石と號すと云う。

利州の義城郡の葭萌縣に玉女房あり。蓋し是れ一大石穴なり。昔玉女ありて此の石穴に入る。前に數莖の竹あり、下に青石の壇あり。毎に風に因て自ら此の壇を掃う。玉女は明月の夜に遇う毎に、即ち壇上に下り、間歩徘徊し、復た此の房に入る。

この他に、龍駒川 走山泣石 軒轅丘 續水 軒轅磨鏡

石裸川 彈箏谷 粉水 燃石 夢口穴 擣衣山 玉女岡
妬女泉 石室山 鼠國 磅礴山 武陵源 金岡 杏園洲

木蘭川 神泉 甜溪水 大翹山小翹山 九疑山 平石などに關する説話がある。

次に建造物に關しては

會稽山に虞舜の巡狩臺あり、臺下に望陵祠あり。帝舜南巡し、九疑山に葬らる。民 之を思いて祠を立て、望陵祠と曰う。

東北巖海の畔に大石龜あり。俗に云う、魯班の作りし所にして、夏には則ち海に入り、冬には則ち復た山上に止まると。陸機の詩に云う。石龜すら尙お海を懷う、我寧んぞ故郷を忘れんやと。

この他に、龍綰宮 堯臺舜館 相思宮望帝臺 離別亭
闔閭夫人墓 姑蘇臺 文種墓 梧桐宮 瀨鄉石堂 大姑
陵石麟 盧君古塚 董家祠 石鼓 始皇石橋 夏禹廟 水
精宮 孝王平臺 貝宮夫人廟 甄后陵 秦皇受珠臺 蒲臺
孔丘墓 春秋臺 招賢臺 子英廟などに關する説話がある。

以上のような異物説話の他に、傷ついた鶴を助けた噲參という男が、鶴から御禮として玉をもらつた話。吳の朱休

之の家の犬が來年のことを予言して歌を歌つた話。後趙の石勒は或時敵兵に捕えられたが、一老父の幻術によつて救われた話。などの如く、異物にまつわる出來事や傳説というものではなく、異物に直接關係の無い話が十條ばかりある。このような説話は任昉述異記の全體的性格からみて例外的なものと考えられる。

以上の如く任昉述異記は、動物、植物、土地、山川、建造物などの珍奇怪異なるものに關する説話を集めたものである。すなわち晉の張華の博物志に類するものであり、鬼神靈怪に關する説話を集める魏晉南北朝の志怪小説集とは、少しく性質を異にするものであると考える。

次に説話の敘述形式についてその特徴を擧げてみよう。

先ず、或事柄に關して今と昔とを對比して述べたものが多いことである。

例えば「昔——、今——」と對比したものに、

昔禹の塗山に會するや、玉帛を執る者萬國あり。防風氏後れて至れば禹之を誅す。其の長は三丈、其の骨節は車に專つ。今南中の民に姓の防風氏なる有るは、即

任昉述異記について（森野）

ち其の後なり。

というものがあり、「俗傳——、今——」「今——、世傳——」と對比するものに

饒州に俗に傳う、軒轅氏鏡を湖邊に鑄ると。今軒轅の磨鏡石あり、石の上は常に潔くして蔓草を生ぜず。

今藥の中に禹餘糧なる者あり。世に傳う、昔禹水を治め、其の餘りし糧を江中に棄つるに、生じて藥と爲るなり。

などがある。「俗傳」「世傳」とは昔から言い傳えられたものであり、「今」に對するもの、すなわち「昔」とみてよい。同じような例として他に、「俗説」「俗云」「俗呼」「吳楚間説」「秦漢間説」「越俗説」「南越謂」「土人云」「海上人云」「南海俗諺云」「越人諺云」「漢世古諺曰」「耆老説」「傳云」「古語云」「古云」「古説」などがある。

次に古い書物や作品、古人の言葉を引用して例證にしているものが多い。例えば

春秋に云う「穀の飛びて蠱蟲と爲る」とは是なり。

詩に云う「彼の淇澳を瞻れば、綠竹猗猗たり」とは是なり。

魏文の詩に曰う「西山に仙童あり、飲まず亦食わず」とは是なり。

の如くである。

このような特徴は、當時しきりに出た地方志の類の敘述形式と全く同じである。一體地理書というものは、現在の事物について述べる際にも、しばしばその事物の過去に溯り、俗傳、古説及び他書の記述を引用する傾向がある。この頃の地方志がすべてそうである。

このような敘述面に於ける地理書風の特徴及び既に述べたような異物志と呼んでも支障ないほどの説話内容からみて、任昉述異記は鬼神靈怪をその内容とする魏晉南北朝の志怪小説集の主流とは別系統のものと考えられる。

明の胡應麟はその少室山房筆叢二十八、九流緒論に於て、小説家を志怪、傳奇、雜錄、叢談、辯訂、箴規の六類に分け、その中の志怪の下に晉の干寶の搜神記とともに述異記を擧げているが、胡應麟のいう述異記がいわゆる任昉述異

記を指すものとすれば、甚だ當を得ていないといわねばならぬ。

(三)

任昉述異記の眞僞については、これまでいろいろ論じられているが、同時同名の書、祖沖之述異記十卷の問題と絡みあつてゐるため、納得のできる解決は爲されていない。

以下、任昉述異記を任昉の撰とする説、後人の僞作とする説について、それぞれ擧げてみよう。

先ず任昉の撰と認めるものとしては、宋の晁公武の郡齋讀書志、漢魏叢書本の任昉述異記にかぶせた清の王謨の序などがある。

晁公武は云う。

述異記二卷、梁の任昉の撰。昉家の藏書三萬卷、天監中に前世の事を采輯し新異を纂述して此の記を爲る。

皆、時の未だ聞かざる所なり。將に以て後來の屬文の用に資せんとす。亦、博物の意なり。唐志以て祖沖之の作りし所と爲すは非なり。

又、王謨は云う。

今、隋唐志を考うるに、並びに祖沖之述異記十卷を載するも、任昉の記なし。しかれども藝文類聚、太平御覽などの書に引く所の祖記は、また往々今本任記に無き所なり。任、祖の二人、當時各自に記あるを妨ぐる無し。而して隋唐志或は偶々失載せるなり。南史本傳も亦昉の撰する雜傳二百四十七卷を載するも、此の記に及ばず。豈即ち雜傳中に在りしか。

これらの説に對して、後人の僞作とするものには、清の乾隆勅撰の四庫全書總目提要、清の周中孚の鄭堂讀書記、近ごろ魯迅の中國小説史略などがある。

四庫全書總目提要に云う。

述異記二卷。昉の本傳を考うるに、雜傳二百四十七卷、地記二百五十二卷、文章三十三卷を著わすと稱するも、此の書に及ばず。且つ昉は梁の武帝の時に卒するも、下卷の「地に毛を生ず」の一條に、「北齊武成の河清年中」と云う。案ずるに、河清元年壬午は、陳の天嘉三年、周の保定二年、後梁蕭巋の天保元年に當り、昉

任昉述異記について（森野）

の卒を距つこと久し。昉安んぞ得て之を記さん。其の後人の依託なること、蓋し疑義なし。或は後人、類書に引く所の述異記を雜採し、益すに他書の雜記を以てして、卷帙を足成す。亦世に傳うる所の張華の博物志の如きか。

周中孚は云う。

述異記二卷、舊、梁の任昉の撰と題す。四庫全書に著錄す。隋志に祖沖之述異記十卷あるも任氏の書なし。

新舊唐志も亦俱に載せず。崇文目、讀書志、通考、宋志に始めて之を載す。是の書は舊聞及び名物を雜記し、頗る冗雜にして端緒少し。中に北齊武成の河清年の事あれば、必ずや彥昇の原本に非ず。蓋し原本久しく佚す、此れ後人の類書に引く所を哀合し、併せて増益するに諸小説を以てして成すなり。乃ち眞僞雜糅の書なり。魯迅も次のように云う。

現行の述異記二卷の、梁の任昉の撰と稱するものに至りては、則ち唐宋間の僞作にして、祖沖之の書名を襲いし者なり。故に唐人の書中、皆未だ嘗て引かず。

任昉述異記の眞偽に關して先ず問題になることは、鄭堂讀書記にも觸れているように、隋書經籍志、唐書經籍志、新唐書藝文志に載録されているのは祖沖之述異記十卷であり、任昉述異記二卷は宋代に至つて、崇文總目、郡齋讀書志、文獻通考、宋史藝文志などに始めて載録されることである。すなわち次の如くである。

隋書經籍志卷二雜傳 述異記十卷祖沖之撰

唐書經籍志卷上雜傳 述異記十卷祖沖之撰

新唐書藝文志卷三小說家類 祖沖之述異記十卷

崇文總目卷三小說類下 述異記二卷任昉撰

郡齋讀書志卷十三小說類 述異記二卷 梁任昉撰云々

文獻通考卷二百十五經籍考四十二小說家 述異記二卷

晁氏曰梁任昉云々

宋史藝文志卷五小說類 任昉述異記二卷

これらの記録によるかぎり、任昉述異記二卷は宋代になつて始めて出現するのであつて、それ以前に於ては祖沖之述異記十卷のみが存在していたことになる。そうして兩者は重複することなく、唐宋間に於て入れ換つていたのであ

る。

祖沖之述異記を載録して任昉述異記を載録しない隋志、唐志について、晁公武は「唐志以て祖沖之の作る所と爲すは非なり」と云い、王謨は「隋唐志或は偶々失載せるなり」と云つて、隋志唐志の誤載失載と考えているが、隋唐に於ける任昉述異記の存在を實證できないかぎり、隋志唐志の誤載失載することはできないであらう。これは唐代以後に於ける僞作の疑いの有力な根據を爲すものである。

次に現行の任昉述異記の中には、唐人諸書に見える述異記説話と同じものが六條入つているが、その中に、唐人諸書に引くものの方が現行任昉述異記にあるものよりも、詳細で且つ筋の通つている場合がある。夢口穴に關する話と朱休之の犬の話の二つがそれである。以下、この二つの話について、唐人諸書に引くものと任昉述異記中のものとを比較してみよう。

先ず「夢口穴」については、任昉述異記では、

南康の楞都縣を西に江に沿えば石室あり、夢口穴と名づく。嘗て船人あり、一人に遇う、通身黃衣にして兩

籠の黃瓜を擔い、寄載されんことを求む。過ぎて崖下に至れば、此の人盤上に唾し、徑ちに崖に下り、直ちに石穴の中に入る。船主初め甚だ之を忿るも、其の人の石に入るを見て、始めて異なるを知る。盤上の唾を視るに、悉く是れ金なり。

となつており、法苑珠林卷三十七に引く述異記では、

南康の零都縣を江に沿いて西に出で、縣を去ること三里、夢口と名づく。穴あり、狀は石室の如し。舊くより傳う、常て神雞あり、色は好金の如し。此の穴の中より出でて奮翼廻翔し、長鳴響徹し、人を見れば輒ち穴の中に飛び入る。因て此の石を號して金雞石と爲すと。昔人ありて此の山側に耕し、雞の出でて遊戲するを望見す。一長人あり、彈はじきみを操りて之を彈つ。雞、遙かに見て便ち穴に飛び入る。彈丸、正しく穴上に著く。丸徑六尺ばかり、下垂して穴を蔽う。猶お間隙あるも復た人を容れず。又、人あり、船に乗りて下流より縣に還るに、未だ此の崖に至らざること數里なり。一人あり、通身黃衣にして兩籠の黃瓜を擔い、之に寄

任昉述異記について（森野）

載されんことを求む。黃衣の人、食を乞えば船主之を與う。食し訖れば船適々崖下に至る。船主瓜を乞うも此の人與えず。仍つて盤上に唾し、徑ちに崖に上り、直ちに石中に入る。船主初め甚だ之を忿るも、其の石に入るを見て、始めて神異なるを知る。向の食器を取りて之を視れば、盤上の唾悉く是れ黃金なるを見る。となつてゐる。兩者を比較してみると、法苑珠林に引くものは

①夢口穴の所在

②「舊傳云々」といふ、此の穴に住む金雞に關する傳説

③「昔有人云々」「又有人云々」といふ、舊傳を實證するが如き二つの昔話

の三部から成つてゐる。一方、任昉述異記に收めるものは、

①夢口穴の所在

②「嘗有船人云々」といふ昔話

という構成になつており、法苑珠林に引くものの、②「舊傳云々」と③の前半の「昔有人云々」とが脱けている。

更にその文字に至つては、任昉述異記の方がかなり簡略である。

「朱休之の犬」については、任昉述異記では、

吳の太皇の時、朱休之の家の犬、歌いて曰く、我を歌うこと能わずと言う、我の梅花を歌うを聴け。今年は故より復た可なり、明年は當に奈何にせんと。休、遂に其の犬を殺す。明年、休が家人並びに死す。

となつており、藝文類聚卷八十六に引く述異記では、

嘉興縣の朱休之に一弟あり。宋の元嘉中、兄弟對坐す。家に一犬あり、來りて休之に向いて蹲り、遍ねく二人を視、遂に頭を搖り笑いて曰く、我を歌うこと能わずと言う、我の梅花を歌うを聞け。今年は故より復た可なり、汝を明年奈何にせんと。其の家恐懼し、犬を斬りて首を路側に擲く。來る歳の梅花の時、兄弟相闘い、弟は戟を奮いて兄を傷つく。官收治す。並びに囚繫され、歳を経て免ぜらるるを得たり。夏に至り、家を舉りて時疾にかかり、母及び兄弟皆死す。

となつてゐる。任昉述異記の方が、藝文類聚に引くもの

よりも全面的に簡略であることは、一一指摘するまでもなからう。

以上の如く、夢口穴、朱休之の犬の話に於ては、何れも唐人諸書に引くものの方が、現行の任昉述異記にあるものよりも、詳細で且つ筋が通つてゐる。凡そ他書を引用する場合、簡略にして引用することはあつても、わざわざ複雑にして引くことはない。構成及び敘述に於て詳細にして筋の通つてゐる藝文類聚、法苑珠林所引述異記が、簡單なる現行の任昉述異記所收の話をもとにして文飾を加えたなどとは考えられない。これら唐人の引く述異記は、恐らく當時存在していた別の述異記、すなわち祖沖之述異記から引用したものであらう。ということとは、藝文類聚、法苑珠林などの撰作された唐代初期に於ては、現行の如き任昉述異記は存在しなかつたことになる。

次に注意すべきことは、唐人諸書の引用に於て「祖沖之述異記曰」とするものはあつても、「任昉述異記曰」とするものは一例も見られないことである。

唐人諸書に引く述異記説話には、

北堂書鈔 七條

藝文類聚 十條

法苑珠林 十一條

初學記 四條

の合計三十二條がある。

此の中、初學記卷十九長人四、同じく卷二十二漁十一に引く二條に「祖沖之述異記曰」とある他は、すべて單に「述異記」として引かれている。祖沖之の名を明記するものが、僅かに二例しか無いのは、當時「述異記」といえば祖沖之のものに決つていて、特にことわる必要が無かつたのであろう。若し祖沖之と任昉の二つの述異記が存在していたのであれば、兩者は當然區別して引用されるはずであり、全然區別されないということはない。そのような區別が爲されていないところを見ると、任昉の名で知られる述異記は、當時存在しなかつた疑いが一層濃くなつてくる。

以上述べた三つの理由から、任昉述異記は特別な證據の出ぬかぎり、後人すなわち唐以後の人による僞作とみなしてよからう。

任昉述異記について（森野）

これまでのことは、既に先人も指摘していたことを實證したまでであるが、さて任昉述異記が後人の僞作であるとする、それは一體どのようにして爲されたものであろうか。この事については人々は全く想像を逞しくしているだけであつた。すなわち四庫全書總目提要では「或は後人類書に引く所の述異記を雜採し、益すに他書の雜記を以てして卷帙を足成す」と云い、鄭堂讀書記では「蓋し原本久しく佚す、此れ後人、類書に引く所を糅合し、併せて増益するに諸小説を以てして成す。乃ち眞僞雜糅の書なり」と云つて、兩者とも類書に引かれてゐる述異記說話を中心として、それに他書の雜記、諸小説を増益したものが任昉述異記であるという。

他書の雜記及び諸小説を増益してゐる、とみることについては、任昉述異記の中に次に擧げる如き、主に地理書、小説からの引用とみられる説話が多く存在することからみて、一應は認められてもよいようにも思えるが、しかしそれは後に觸れるようにそうではない。それらの例は次の如きものである。（上下は上巻下巻を、數字は說話番號を表わす）

山海經	上 15	上 24	上 78	下 107	下 110	下 142
晉、常璩、巴志	上 69					
晉、常璩、蜀志	下 146	下 148				
晉、常璩、華陽國志	下 156					
晉、羅含、湘中記	下 149					
晉、伏琛、三齊略記	上 90					
晉、鄧德明、南康記	上 97					
晉、束皙、發蒙記	上 100					
晉、郭延生、述征記	下 106					
晉、太康三年地記	下 104					
宋、沈懷遠、南越志	上 30					
宋、王孚、安成記	上 87					
宋、盛弘之、荊州記	下 154					
宋、山謙之、南徐州記	下 122					
紀義、宣城記	上 85					
鄭緝之、東陽記	上 96					
尋陽記	上 128					
吳錄地理記	下 117					

神異經	上 71	上 116
十州記	上 81	
穆天子傳	上 145	
郭子橫、洞冥記	下 101	
晉、張華、博物志	下 108	下 111
		下 112
		下 139
晉、干寶、搜神記	上 80	上 92
	上 102	上 156
	下 115	下 153
晉、王嘉、拾遺記	上 91	
晉、陸機、要覽	下 103	
郭氏玄中記	上 82	上 137
	上 137	下 133
宋、劉義慶、幽明錄	下 95	下 152
宋、劉敬叔、異苑	上 83	上 101
	上 105	上 106
		上 118
西京雜記	下 150	
淮南子	上 95	下 32
管子	上 94	
論衡	上 131	下 94
後漢書	下 130	

し、又これ以外にも出典を持つ説話が存在するはずである
この中の大部分は更に古い出典があるものと考えられる

が、今のところ十分にはわからない。

又、類書に引用されている述異記説話を輯合したものと
みることについても、次の如き疑問が存する。すなわち若
し唐人諸類書によつて輯合したものとすれば、北堂書鈔、
藝文類聚、法苑珠林、初學記などの唐人諸書から見出され
る三十二條の述異記説話の中、現行の任昉述異記の説話と
ほぼ一致するものは僅か六條に止まり、後人が意識して輯
合したとみるにはあまりに粗雑である。又宋代の太平御覽、
太平廣記、事類賦などによつて輯合したものとすれば、宋
初の崇文總目には「述異記二卷任昉撰」とあり、當時既に
任昉述異記二卷は存在しているので、更めて輯合する必要
はなかつた。いずれにしても類書に引かれていた述異記説
話を中心として偽作されたものとは考えられない。

四庫全書總目提要及び鄭堂讀書記の説が認められないと
すると、任昉述異記は果してどのようにして偽作されたの
であらうか。

現行の任昉述異記をみるに、次の三條の説話に於て、
「昉按云々」の語が見られる。

任昉述異記について（森野）

南海の中の盤古國は、今の人皆盤古を以て姓と爲す。
昉按ずるに、盤古氏は天地萬物の祖なり。然らば則ち
生物は盤古に始まるなり。

今會稽にて禹廟を祭るに熊を用いず。黃能と曰うは
即ち黃熊なり。陸に居むを熊と曰い、水に居むを能と
曰う。昉按ずるに、今江淮中に黃熊と名づくる魚あり。
吳江の中にまた魚歩、龜歩あり、湘中に靈妃歩あり。
昉按ずるに、吳楚の間にて浦を謂いて歩と爲す。語の
訛なるのみ。

僅かに三例ではあるが、この任昉の按語から現行の任昉
述異記そのものは偽作ではあるが、その内容は任昉自身の
手に成つた書に本づいているのではあるまいか、という推
測が可能となる。

これについて思い當るのは、任昉地記二百五十二卷であ
る。隋書經籍志によれば任昉地記は「陸澄の書に八十四家
を増し、以て此の記を爲る」というものである。陸澄の書
とは、南齊の陸澄の地理書一百四十九卷のことであり、同
じく隋書經籍志によれば「山海經已來の一百六十家を合し、

以て此の書を爲る」といつたものである。つまり任昉地記は、山海經已來梁に至るまでの地理書を合鈔して成つたものである。

一體中國に於ける地理書は、山川郡國の體系的な記録というよりも、むしろ各地の異聞異事の記録の傾向が強い。殊に魏晉南北朝の地方志ではその傾向が強く、南州異物志、涼州異物志、扶南異物志などの如く、異物のみを対象としたものである。

このように任昉地記が古今東西の異聞異事を聚合したものであることと、既に述べた如く、任昉述異記には内容形式ともに地理書風の記述が多いことを考え合せると、この兩者は非常に密接な關係を持つていることが知られる。すなわち任昉述異記は任昉地記中の異聞異事に本づいたものではあるまいか、ということが考えられる。

このことを證明するためには、述異記と地記の兩者に於て共通の記事を求めることが最も良い方法であるが、現在任昉地記の佚文とすべきものは一條も殘されておらず、任昉地記の基となつた陸澄地理書の佚文が三條、太平御覽、

太平寰宇記にあるだけである。

陸澄地理記に曰く、襄陽に襄水なし。(太平御覽 卷六十三)

陸澄地理抄に云う、袁府君は後漢の人なり。此の橋を造る。即ち晉の周處の少き時に、長橋の下の人食人蛟を斬るは即ち其の處也。其の橋は一十三間あり。(太平寰宇記 卷九十)

陸澄地理志に云う、筑水の沔水に會する處、之を筑口と謂う。(太平寰宇記 卷百四十五)

なお單に「地理書」「地理志」「地理記」「地理抄」と稱するものは、諸類書にかなり多く引用されており、中には次の如く任昉述異記にある説話と同一のものもある。地理志に曰く、桃山は即ち華萊山なり。一に義珠山と名づく。山上に井あり、窺ふべからず。窺ふ者は歳に盈たずして輒ち死す。又云う、山上の井に鳥あり、井中に巢く。此の鳥は金喙にして黑色なり。見みわるれば則ち大水あり。(太平御覽 卷四十二)

蘭陵山に井あり、異鳥其の中に巢く。金翅にして身は黒し。此の鳥見みわるれば即ち大水あり。井は窺

うべからず、窺う者は歳盈ちて軋ち死す。(任昉述異記)

地理志に曰く、范蠡の宅は湖中に在り。海杏の大なる

こと拳の如きあり。(藝文類聚卷八十七)

范蠡の宅は湖中に在り。桑紵の英果多く、海杏の大

なること拳の如きあり。(任昉述異記)

これだけの資料から見ても、これらの地理書と任昉述異

記との關係が想像できるのであるが、しかし現在のところ

任昉地記と任昉述異記との關係を決定づける十分な證據は

ない。ただ兩者を關係づけることによつて、任昉述異記中

に他書の雜記や諸小説が多く含まれていることについて、

四庫全書總目提要や鄭堂讀書記とは異なる新しい見方が出來

る。すなわち任昉述異記所載の他書の雜記や諸小説は、他

書や諸小説から直接に引用されたものではなく、既に任昉

地記に引用されていたものではあるまいか。例えば、任昉

述異記に山海經にある說話が記載されている場合、それは

後人が山海經によつて増益したものではなく、既に任昉地

記に引用されていたものである、というわけである。この

點からさきに四庫全書總目提要及び鄭堂讀書記の、後人が

他書の雜記や諸小説によつて増益し任昉述異記を成したといふ説を否定したのである。

以上、任昉述異記の偽作方法について、證據が十分でないため確かなことは云えないが、それは後人が任昉地記より異聞異事を抜き書きしたものに「述異記」の名を與えて成つたというのが私の推測である。

注

① 祖沖之述異記については、廣島大學「支那學研究」(昭和三十五年十一月特輯號)の拙稿を見られたい。

② 隋書經籍志の地理類に記載されている地理書は、ほとんど魏晉南北朝の地方志であり、當時それらが盛んに編まれたことがわかる。その内容は各地の異聞異事を主とするものであり、中でも南州異物志、扶南異物志、涼州異物志、臨海水土異物志と題するものの如きは、その地方の異物の性狀、それにまつわる出來事や傳説のみを集めたものである。

③ 現行の張華博物志は

地理略 地 山 水 山水總論 五方人氏 物產 外國 異人
異俗 異產 異獸 異鳥 異蟲 異魚 異草木 物性 物理
物類 藥物 藥論 食忌 藥術 戲術 方士 服食 辯方士
人名考 文籍考 地理考 典禮考 樂考 服飾考 器名考 物
名考 異聞 史補 雜說

このように諸事百般にわたつてゐるが、唯鬼神靈怪に關するものは含まれていない。しかし現行の博物志は後人の手にかかるものであり、原書がこのようなものであつたかどうか不明であるが、晉の王嘉の拾遺記卷九晉時事には次の如くその内容について述べてゐる。「華好みて祕異圖緯の部を觀、天下の遺逸を摺采し、書契の始めより、神怪及び世間閭里の説く所を考驗し、博物志四百卷を造り武帝に奏す。帝詔して詰問す、卿の才は萬代を綜べ、博識倫なし。然れども事を記し言を采るに、亦た浮妄多し。更に浮疑を芟截すべし云々と。分ちて十卷と爲す」これによると王嘉の頃の博物志十卷にも、鬼神靈怪に關するものは含まれていなかったことがわかる。